14　群猿之図　川端玉章　一幅

絹本着色
明治二十三年（一八九〇）頃
本紙二二七・四×一四四・七

岩山で遊ぶ猿の群れを卓越した筆で描写した作品。伝来記録などから制作は明治二十三年頃であることが分かるが、詳細な制作経緯は明らかではない。ただし、表装には特別に仕立てられたと思われる裂を用いている点や、本紙だけで縦二メートルを超える大幅である点、そして何よりも細部の筆線にいたるまで神経の行き届いた描写の入念さから、御下命を受けて特別に描かれた作品である可能性が高い。

親猿、子猿あわせて十五匹の猿には愛玩動物のような可愛らしさはなく、また擬人化して喜怒哀楽の表情をつけるのでもなく、猿本来の野性味を感じさせる面貌となっている。江戸時代中期に猿猴図で名を馳せた森狙仙は、猿の体を描くのに輪郭線を用いず、細筆を幾重にも引き重ねてその柔らかな毛並みを表現したが、玉章もそれと同様に、墨、金泥、胡粉の三色の線を細筆で重ねて猿の体毛を表している。猿の体毛の柔らかさと対比するように岩塊は荒々しい皴法で描かれる。藤の蔓を引っ張り合う猿や、笹をつたって岩を登ろうとする猿、藤の枝先で蜂をつかまえようとする猿、思い思いの仕草をした猿たちは躍動的で観る者を飽きさせない。

それでいて画面から雑然とした印象を受けないのは、画面の大部分を構成する岩山が左下から弧を描きながら左上へと、それと同時に次第に手前から奥へと向かい、さらに藤の幹がうねりながらそのリズムを強調するよう構図が計算されているからだろう。明治二十年代の玉章の作品の中でも完成度の高さで群を抜いていると言えよう。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 ―円山派の伝統と発展
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections